

「あした死ぬ幸福の王子」

「あなたは明日死ぬかもしれません。」

そう言われたらどうでしょう？傲慢な王子が、余命 1 か月と宣言されることから始まる物語。ハイデッガー哲学を寓話仕立てで分かりやすく解説された本に刺激を受けた高野です。

実はこの余命宣告の体験学習をしたことがあります。終活の第一歩を踏み出して頂くために作られた相続診断協会の「エンディングノート作成セミナー」です。いくつかの質問に答えていくと、終活への抵抗感が減って、エンディングノートに取り掛かりやすくなります。その中の最後の質問が次のものです。

「あなたの命はあと 1 年と余命宣告されました。1 年のうちにどうしてもやりたい事を 3 つ書いてください。」

3 つ書き上げると、グループ内で討論します。当時（10 年以上前）、参加者の多くが営業職だったからか、「余命宣告されたら世話になったお客様に御礼を言って回りたい」という人が多くて驚きました。趣味や家族のことばかり書いた自分が、なんとも恥ずかしく思えたものです。

また他人の発表を聞いていると「余命宣告されなくたって、そんなの今すぐやればいけないか」という思いも湧いてきます。私含め多くの人が今できることを先延ばしに生きていることを気づかせてもらいました。

そして今回の読書を終えて、久しぶりにエンディングノート作成セミナーの資料を見直すと、更に驚いたことがあります。それは余命宣告を受けて 1 年以内にやりたい 3 つのことは、今ではさほど関心のないものだということです。

死を意識して、「死ぬ前にこれだけはやっておきたい」と思っても、それは案外、薄っぺらなものだったのです。かの S・ジョブズも「もし今日が人生最後の日だとしたら、今日やろうとしていることを本当にするだろうか？」を問い、「違う」という答えが続くようだったら何かを変えなければいけない」と言っています。

「あした死ぬ幸福の王子」も余命宣告され、「死」を意識したことで、人生を見つめ直し、かけがえのない自分に気付きます。誰とも交換不可能な自分に気付くのです。

そして自分を大切に思えば思うほどに、かけがえのない他者に気づき、「本来的な生き方」にたどり着くのです。

仰々しく思われるかもしれませんが、今、世界各地で広がる紛争も死生観を見直すことで減るのではないかと思わせてくれる一冊です。

最後に心に刺さった一文を。

「仮にこの世から死がなくなり無限に生きられるとしたら、人は自分の人生を真剣に考えたりはしないだろう。」